

皮内反応の低下しているものは polycyclic 10 例中 6 例(60%), monocyclic 4 例中 0 であった。Acute onset の 9 例中 5 例 (55.6%), polyarticular 及び monoarticular type 5 例中 2 例 (40%) であった。

これらの結果から、発症時に皮内反応が抑制されている症例は polycyclic の経過をとるであろうと考え、治療上とくに関節機能障害を防止する点に注意を払うことが重要である。

若年性関節リウマチにおける臨床的、免疫学的検討

信州大学小児科 赤 羽 太 郎
川 合 博
依 田 哲
杉 田 憲 一
宮 川 幸 昭

〔目的〕 若年性関節リウマチの臨床像の特徴とステロイド離脱困難例に対する治療法を検討するため、本症患者の臨床的観察を行った。また、本症発症機構に関連して免疫学的検討をも加えた。すなわち、PFC 法により患児の T cell の helper 能、Suppressor 能につき検策した。

〔対象ならびに方法〕 対象は当院小児科に入院した JRA 患児 8 例である。

helper 能、suppressor 能の検策方法は、ヘパリン加末梢血より、Ficoll-Hypaque 比重遠心法で mononuclear cell を分離し、羊赤血球とロゼットを形成させ、再び Ficoll-Hypaque により重層遠沈し、ロゼット形成細胞と非形成細胞に分類した。ロゼット形成細胞は、0.83% NH₄Cl にて羊赤血球を溶血後、T cell として用いた。また、ロゼット非形成細胞を B cell として用い

た。

helper 能は各 3×10^5 の B cell, T cell と PWM, 羊赤血球を加え、炭酸ガス培養器にて 7 日間培養後、Cumingham 法により羊赤血球に対する溶血斑形成細胞を数えることにより測定した。

Suppressor 能は $1 \times 10^6/ml$ の T cell に対する Con A $10 \mu g/ml$ を加え、48時間炭酸ガス培養器にて培養した。この T cell 3×10^5 と B cell 3×10^5 , PWM, 羊赤血球を加え、炭酸ガス培養器にて 7 日間培養後、同様に PFC assay を行ない測定した。対照として正常の B cell を用い出来た PFC 数を 100 として比較した。

〔結果〕 (I) JRA 患児の初期像は表 1 のごとくであった。いずれも、初期に発熱、関節痛(関節炎)をみとめている。8 例中 6 例は初期に subsepsis allergica と診断されている。これらは弛張性の高熱が持続し、発疹、

表 1 Initial findings of J. R. A and Subsepsis allergica.

	Name	Sex	Age	Fever	Joint pain	Exanthema	Increase of W. B. C	Anemia	Swelling of Lymphnodes
S. A ↓ J. R. A	T. K	F	2y8m	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)
	Y. A	M	6y6m	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)
	T. I	M	6y6m	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
	T. I	M	6y	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(+)
	Y. S	F	15y	(+)	(±)	(±)	(+)	(+)	(+)
J. R. A	Y. N	F	4y	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
	J. N	F	5y	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)	(-)
	K. K	M	6y6m	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)	(-)
S. A	Y. K	F	5y9m	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(+)

*S. A; Subsepsis allergica.

白血球増多などを認め、全身症状が強く、関節症状の遅れてみとめられるものもみられた。これらの症例は副腎皮質ステロイドにて治療され、その後難治化しステロイド依存性となっている。

(3) ステロイド依存性となった5例にD-penicillaminによる離脱あるいは減量化がえられた。D-penicillaminは発熱、関節痛などの急性症状に対して速効性は期待できなかったが、比較的長期の使用により効果が発見した。D-penicillamin使用中2例に経過中、低ガンマグロブリン血症をみとめた。

(3) JRA における helper 能, Suppressor 能を図1に示した。helper 能は軽度低下がみとめられ, Suppressor 能は JRA 患児の ConA 誘導 T cell を用いた場合の方が, 正常の ConA 誘導 T cell よりも有意に PFC 数が多く, Suppressor 能の低下がみとめられた。

〔結論〕 (1) JRA 患児の初期臨床像の特徴を示した。

(2) ステロイド離脱困難例に D-penicillamin が有効であった。

(3) JRA 患児では T cell の Suppressor 能の低下がみとめられた。

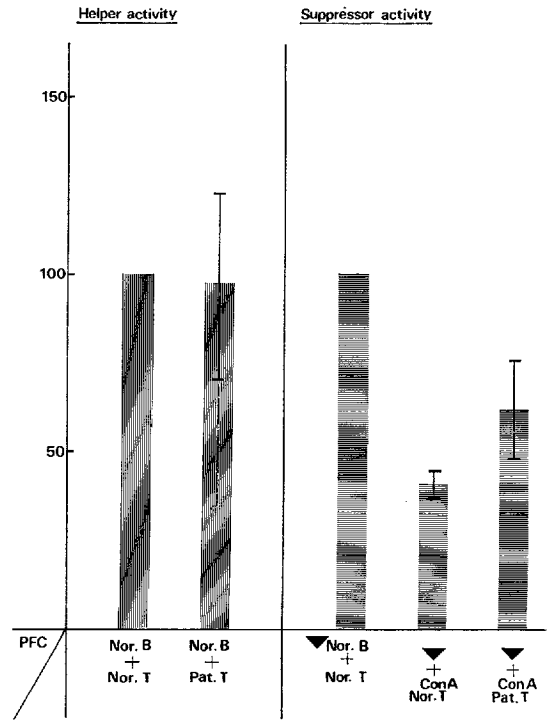


図1 Suppressor and Helper activity in J. R. A.

JRA 患者リンパ球 Subpopulation とリンパ球の反応性に関する研究

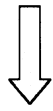
横浜市立大学小児科 植 地 正 文
 沢 登 昭 一
 西 山 裕 子
 横 田 俊 平

緒 言

RA患者リンパ球の各種抗原に対する反応性に関しては今日までに数多くの報告がみられるが、その成績は一定していない。若年性関節リウマチ（以下 JRA と略）においても Candida や SK-SD などの遅延型皮内反応は低下している場合が多いが、PHA などの非特異的 mitogen に対するリンパ球の反応性については成人例と同様、その成績はまちまちである。JRA の場合、その病型を systemic type, pauciarticular type, Polyarti-

cular type の三つに大別することができる。従来の報告ではこれらをまとめていることが多く、活動性の有無、使用薬剤の有無がリンパ球の反応性に影響を与えている可能性がある。

したがって、JRA の細胞性免疫能に関しては再検討が必要である。今回、われわれは JRA の Polyarticular type について、PHA および溶連菌々体成分の crude C-Polysaccharide 抗原に対するリンパ球の反応性を検討した。また JRA 患者リンパ球 Subpopulation に



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕若年性関節リウマチの臨床像の特徴とステロイド離脱困難例に対する治療法を検討するため、本症患者の臨床的観察を行った。また、本症発症機構に関連して免疫学的検討をも加えた。すなわち、PFC 法により患児の Tcell の helper 能, Suppressor 能につき検策した。